

浄土

四月号

花まつり・奇蹟

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承認雜誌第三五二号)
昭和三十九年三月二十五日 印刷 昭和三十九年四月一日発行



法然上人鑽仰会

選擇集私解

大正大学教授 文博 竹中信常著

新書版 一二〇頁
定価 一二〇円
送料 三〇円

法然上人が現代においてになったら「選擇本願念仏集」をこのようにおとさになるであろう 念仏信仰の真髓を明らかにした全浄土宗徒必読の書

目次

宗祖と共に
やすらげき旅路
念仏にすけささぬ
特急「ごくらく」号
砂糖と塩
いつでもどこでも
ふり仰ぐ山の高さ
浄土への道
借金と念仏
サシミ念仏
一に一たす二
偏依法然
あとがき

発行人 法然上人鑽仰会
発行所 大道社

ご法語で味う 念仏の真随

村瀬 秀雄著

一枚起請文をめぐって

新書版二〇二頁・写真版二葉
価 一二〇円・(送 三〇円)

目次……一枚起請文とは……観念の念仏を排す……

聖道はあり得ない……信仰の目標……本願念仏を
申す……ひらに信ずる……すべてを包含する……
二尊の前に誓う……只一向に念仏すべし……御遺
訓にはげむ……二相承の合流……ご法語索引

信徒必携の奥義書

ご法語一〇〇句を収録

発行人

法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田町一の二一
振替 東京 八二一八七番



法然上人御法語

げにも凡夫の心はものぐるひ、さ
けにゑひたるがごとくして、善惡に
つけて、おもひさだめたる事なし。

— 目 次 —

表紙 花かざりをつけた象

随 想	楠山春樹・福島純江 ... (2)
花まつり風土記	平 祐 史 ... (4)
— . — . — . — . —	
父は奇蹟だと言った	安 居 香 山 ... (8)
信仰と現代病	小 野 泰 博 ... (14)
死刑囚を教誨する	乙 山 如 雲 ... (18)
— . — . — . —	
近世文名録 漆間徳定僧正	高 橋 良 和 ... (12)
信仰の記録 私の念仏信仰	清 水 勝 己 ... (24)
茶の湯に生きた人々 織田信長	林 左 馬 衛 ... (22)
ご法語をいただく	(17)
表紙の解説	(21)
一口笑話	(16)
— . — . — . —	
中国浄土教道綽大師と玄中寺	牧 田 諦 亮 ... (28)

袖ふり合ふも他生の縁

楠山 春樹

(早稲田大学教授)

「いとしや、いづくの人なるぞ。見ればふけたる角前髪、袖ふり合ふも他生の縁、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、……」竹田出雲作義経千本桜、すしやの段。前髪の若武者小金吾の遺骸の傍を通りすぎたすしやの弥左衛門が、「いづこの人かは知らぬがお気の毒に……。」と念仏を唱えるくだりの台詞である。

「袖ふり合ふも他生の縁」という有名な諺が文献の上に出て来るのは、やはり江戸も中ごろからのことであるらしい。「往来で一寸すれちがった程度のごく浅い間がらでも、それは前生において何らかの縁があったればこそ」と、人間相互の愛情を強調することに、この諺の意味があると思われるが、ここまで徹底すれば、この世に赤の他人などというものは全く存在しなくなる。正に仏教的ヒューマニズムの極致を示すものといつてよいであ

「触れ合ふ」となっていたのであるが、たまに惜別を意味する「袖の振り合ひ」という言葉が別に行われていたために、両者が混同して「振り合ふも」と言い慣わされてしまったのではないだろうか。

一方、下の句の「他生の縁」は、本来は「多生の縁」であつたともいう。二生三生と累なる多生の方が、他生よりも一層縁の深いことを示すことになるが、いずれにせよ語感としては、それほどちがいはなさそうである。ところが、「他(多)生の縁」は、当今では大ていの場合「多少の縁」として受け取られているらしい。俚諺の口誦性、大衆性からいえば、己むを得ない訛りである。むしろこの訛りを、この諺の現代的解釈としてそのままに認めてもよいのではないか。諺のもつ本来の精神は、それなりに生かされていると思うし、また少しくらい表現は変わつても、末長く伝えて行きたい名諺であると考えからである。

ていた。大和路の昔を偲ばせる、ゆかしい形のものであつた。

母が大切にしていたものに、九州香椎宮の鈴がある。薬師寺の神功皇后神像のお姿をかたどつたもので、掌のうちに眺めると、皇后にまつわる九州地方の説話がうかんでくる。音色のしびい鈴であつた。

奈良には大型の鈴をみかける。大仏さまあつてのことかもしれぬ。大仏殿前の燈籠をまねて八角型の鈴は、うす納戸色に紅の打紐をつけ、すずやかな音色をたてていた。そのほか埴輪や、古寺の軒丸瓦に仕立てたのもあつて、こんなのは堂々と桐函におさまっていた東北地方には鐘馗さまや、狂言「朝比奈」にでてくるえんま大王そっくりのものもあるが、関東山間部の社寺などには、梅干のたねの鈴なりのような、がっかりするほど素朴な神楽鈴や、野趣のある茄子の鈴がある。

四月もなかばすぎ、修学旅行にでかけた私は、母にたくさんのお土産を買いこんだ。生意気な世話やかせの子供であつたから、こういう時に点数をかせこうとの下心から、大い

ろう。

この諺の伝承には、いくつかの問題がある。第一は上の句について。当今では一般に「袖触れ合ふ」「袖摺り合ふ」と言い慣わしているが、古いところでは、始めにかかげた例文に「袖ふり合ふ」とあるのを始めとして殆んどが「袖振り合ふ」「袖の振り合せ」と記されている。ところが、どうも「袖振り合ふ」では、往来で一寸すれちがうという意味が出て来ない。一説によると、「袖振り合ふ」とは、袖を振り合って別れを惜しむしぐさ、従ってこの諺の原義は、「別れに臨んで袖を振り合うような仲となったのも前生の縁あればこそ」の意味であったという。そうすると、この諺の本来の成り立ちは、吾人の理解とは実はかなり違ったものであったことになる。また、上の句はあくまでも軽く、下の句はいよいよ重いところ、この諺の妙味があると思っていたのに、一説に従うと、上の句もすこぶる重いものとなって、その点の面白味も半減してしまう。私の想像であるが、この諺が作られた時には、やはり「摺り合ふ」

「鈴」によせて

福嶋 純江

(大道社編集)

こけしは東北地方の民芸品といっても、今では方々でお目にかかれる。旅行先で土産ものを物色していると、必らずといたいほどに氾濫している。こけしにくらべると、お鈴はなかなか見当らない。泥くさい郷土玩具のせいかもしれないが、地方によっては結構、趣向をこらした土鈴が作られている。

私の母はお鈴が好きで、かなりの数をあつめていた。といつても母の伯母の趣味をうけついでのこと、凝り性の大伯母は鈴をいくつも懸けられるようにしつらえた風炉先屏風をもっており、折りにふれては好みの鈴と懸けかえては娛しんでいたようである。母の方は子を育てるのに忙しく、せいぜいお茶懸けの風鎮につかつて喜んでゐる程度であつた。大和の土産と思うが、白地に青磁色で「駅」とおかれた、角型の鈴の対を、ことに愛用し

に鈴を買いこんだものである。叡山、奈良と埃をかぶりながら吉野に入つて「静」の鈴をみつけた時はうれしかった。眉をはき、涼しい目もとに、紅をさした唇が、能の面に通ずる気品をもっていた。般若面の鈴も買った。花御堂に見える、桜花をあしらった吉野山の鈴がほしかったが、のこり少い財源にあきらめたことを忘れない。青蛙の鈴もみたがグロテスクな感じで、手にとる気にもならなかった。今おもうと蔵王堂の蛙飛にちなんだものらしい。

母がこうして手ずからあつめ、周囲の人々から贈られた数々の鈴には、それぞれに母なりの思い出も、含まれていたようである。母がなくなつてからの心の虚しさから、ものをあつめるといふ行為に、みようなさからいをおぼえた私は、母の苦心の蒐収品をせがまれるままに人にわけてしまい、手元には殆どない。このところお鈴のあれこれが、しきりとおもいだされるが、年令のせいかと思つたり、また案外、気持の上のゆとりかもしれないと考へてみたりしている。

花まつり風土記

平 祐 史

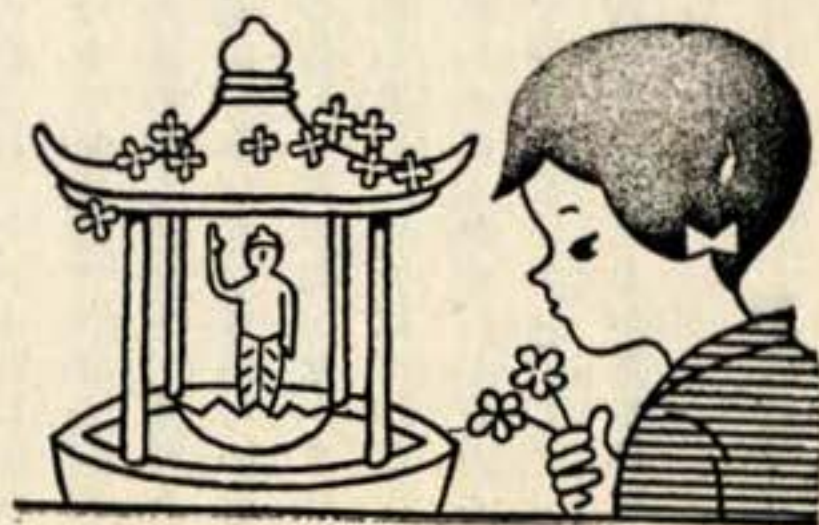
(仏教大学助教授)

「花まつり風土記」と云う美しい題名を編集者から与えられたので、今日各地で民間に伝承する「花まつり」の民俗を美しく描いてみようと思い、筆者の手元にある村々の伝承や民俗資料を探して見たが、それは大変なはずれであった。ここで云う「花まつり」とは四月八日の釈尊の降誕を祝賀するいわゆる「仏生会」「灌仏会」を指すのであって、つまり仏教の「花まつり」なのである。ところが日本の各地の農村にもやはり「花まつり」と呼ばれる行事があつて今日なお盛んに行われているが、農村に見られる「花まつり」は仏教のそれと名称や呼称は同一であってもその行事内容はすっかり異つたもので、必らずしも「仏生会」や「灌仏会」を意味す

るものではないのである。

例えば愛知県設楽郡のあたりには、やはり「花まつり」と呼ぶ民間の行事が伝わるが、この行事は花の咲く春の四月八日に行われるのではなくて、毎年十二月から一月にかけて花神樂とも云われる神事舞踊が催されて、農作物の豊作や災除の祈願をする神事芸能である。

このように農村の「花まつり」は、農民の生活と直結した農耕儀礼から来る神事を指す場合が多いのである。従つて、「花まつり」を「仏生会」とする今日的なしかも仏教的先入観でもって農村に伝承する「花まつり」を訪ねたならば必ず奇異に思い面くらうことがしばしばあるのである。筆者もその例にもれず大いに面くらつた一人であつた。そこで、私は特定の地方に単に「花まつり」と呼ばれて伝承する民間行事と仏教で云う「花まつり」とは呼称は同じでも全く同義でないことを先ず知つた上で、仏教の「花まつり」が村落や民衆の生活とどの様な形で関連しているかを考える必要がある。



仏教の「花まつり」つまり四月八日の「灌仏会」又は「仏生会」は、古来わが国では宮中や大寺院で美しく着飾った貴族や女房達、更に身分の高い僧侶達の間で華やかに営まれた貴族社会の年中行事であった。従って、少くともこの行事は農村や民間から始まった行事でないことは自明である。つまり仏教の「花まつり」は水の高きより低きに流れるように、貴族社会から徐々に民間に下降し拡まって行ったものと考えるのが妥当であって、近世になってやっと農村にまで及んだのではないかと考えられる節が見られる。

さて、元来、貴族の手にあつた仏教の「花まつり」がどのようなにして民間に下降し拡まって行ったのであろうか。勿論、その答えの一つとして、当時の仏教が盛んで村々に寺院が建立され、当時の僧侶が熱心に伝道布教した力に負う所が多いとする理由も否定出来ないが、ただそれだけの理由で民間に、特に封鎖的なしきも村落固有の民間信仰を根強くもつ村々の中へ簡単に仏教の「花まつり」の行事が拡まり下降したとは考えられない。むしろ民間に「花まつり」を受け入れる何らかの素地があつたからこそ、宮廷や貴族達の間で流行した「花まつり」が何の抵抗もなしに民衆の間にとけ込めたのではなからうかと考えられるのである。それでは民衆の間には、どのような形式で仏教の「花まつり」を受け入れる素

地があつたのか各地の民俗や行事を探ってみることにしよう。

そこで、仏教の「花まつり」の行われる四月八日と同じ日に各地の農村ではどんな行事が行われているかをかいまみると、一般に旧暦の四月八日を「卯月八日」と呼び、この日をやはり特別の日と定めているところが多く、福島県の東南部ではこの日を神の日といって田にはいることを忌む風があり、又鹿児島県や徳島県の一部では、この日に村人達が丘や山に登って飲食して楽しむと云う風習があると伝えている。滋賀県神崎郡五箇荘町の小幡神社には、俗に「ヘソの宮さま」と呼ぶしめ縄をめぐらした大木があり、この日に米を供えて祭礼を営んでいる。更にこの日、東日本の名山筑波山、赤城山、三峯山などの神社では例祭を営み獅子舞や太々神楽、巫子舞などの神楽や風流が催され、その山にある神霊がこの日と十月八日を境として山を上下して居所をかえるという信仰を伝えている。このように農村の各地では旧暦の四月八日を特別に神の日と定めているところが多く、農民の休日となつている例をしばしば見ることが出来るのである。つまりこの日を境として冬中、山に帰っていた山の神を春から秋まで里に迎えて田の神とすると云う春まつりが全国的に農民の間にあって、しかも四月八日をその期日としている地方が

かなり多いのである。その上この日が月の上弦の日であり、実際の農耕の開始の頃に当たっていたから農民の重要な祭日となったのであろう。

このように考えて来ると、四月八日は奇しくも村々では釈尊の降誕を祝う灌仏会の行事以前に何らかの形でお祭りが営まれ、農民の春の休日となっていたことがわかるわけで、ここまで話を進めてくると誰れしもかつて宮廷で営まれていた灌仏の会式が田舎の村々までどういう意味で及んで来たか、又比較的大きな抵抗もなく村々の生活の中に這入り得たと云う理由がぼんやりとわかって来るようである。けれども実際に仏教の「花まつり」が村々に這入り込むには相当の時間と困難があったかも知れないのである。幸いにも「花まつり」を迎える四月八日の頃は、云うまでもなく春から夏へ向うとする好季節であるから、野山には美しく花が咲きほこり、村々では春まつりのことを花まつりと呼んでいたかも知れないのである。そうして心よい春風に吹かれて、花が散り始める頃、人々は行疫神が飛散って人に祟る恐れがあると信じ、これを鎮めるために鎮花（はなしづめ）の祭りを行ったのである。京都の仏教大学の近くにある紫野の今宮神社には「やすらい祭」と呼ぶ鎮花祭が毎年四月十日に行われ、念仏踊の体裁をもった「やすらい踊」が伝わっている。しかし農村で云

う花まつりの「花」とは、一般に私達がすぐさま思い浮べる梅の花や桜の花を指すのではなく、実は農民が最も大切に扱っている稲の花のことを指すのであって、今宮神社の「やすらい踊」の唱言に「やすらへ花や」とうたう花も愛知県北設楽郡の「花まつり」の神事で指す花も稲の花をあらかじめ予祝しておこうとするいわゆる花育ての意味から名づけられたものであるらしい。ところがこの様な農村の神事は必ずしも仏教と無縁ではないようで、神事に催される踊りなどの風流は、念仏踊りの要素がとり入れられて発達して来た点を見逃せないのである。要するにいつの間にか農民の素朴なお祭りが念仏の流行と相まって、除々にではあるが仏教的な荘厳や色彩を加えて、祭を更に華麗にして行く傾向があったことを意味するのである。

さて今まで村々の春のお祭を眺めて来たが、更に「灌仏会」や「仏生会」いわゆる仏教の「花まつり」が花まつりと呼ばれるにふさわしい形をととのえ、しかも農村のお祭と、除々に接近して行く姿を訪ねることにしよう。

中部地方では卯月八日に山つつじや藤の花をとり、竿の先に結んで高く立てる所が多く、これを夏花、或は天道花、又は八日花などと呼んでいるが、云うまでもなくこれは前に述べた農村の花まつりであって、やはり春の花を稲の象徴と見

立てた習俗と見てよからう。ところが江戸時代の書物である『塩尻』には、「四月八日熱田の社 灌仏会をなす 花のとうと称す。京師の俗四月八日 つつじ及び新花を竿の先に結付けて九輪のごとくし家々に立て、花の塔といふ」と伝えているのと全く一致するいかにも花まつりらしい風俗である。このように述べて来ると、農民の生活と直結している農耕儀礼と仏教の「花まつり」とがいよいよ接近して来たことを思わすのである。

それでは仏教の「花まつり」すなわち「灌仏会」が季節や農作物の成長と全く無関係のものと考えられていたかと云うとそうではなく、灌仏の意義を説いた『灌洗仏形像經』と云うお経の中に「仏言はく 四月八日を用ふる所以は春夏の際は狹罪悉く畢り 万物普く生じて毒氣未だ行はれず、寒からず熱からず 時氣和適し正しく是れ仏生の日なるを以てなり」と説いているのを見ると、どうやら先に述べた村々で四月八日に行われるお祭と同様な意義が見出されるのである。このように農村の卯月八日のまつりと仏教の「花まつり」の関係がいよいよ接近して来たことを示し始めたので、もう一度ふり返ってこの二つの関係をとりとめてみることにしよう。農村で行われる卯月八日の祭は季節の変わり目で山の神が田の神となる日であり、農事の予祝の日である。奇しくも四

月八日の仏教の花まつりは釈尊の誕生を祝う祭会であり、お経にもやはり季節の変わり目であって、万物普く生ずる好季節であり、無量の功德をそなえる仏がお生れになるのは不思議でなく、まことに仏の誕生にふさわしい日であると説くのである。このようにこの二つの考え方は、形式はちがっていても実は本質的に全く同じものと見てよいであろう。従って、古来、宮廷で営まれた灌仏会が何の抵抗もなしに農村社会まで及んで行ったのは、恐らく元来農村の間に行われて来た卯月八日の農事を予祝するお祭を踏えて這入り込み、いつしかその素朴なお祭が仏教によって莊嚴化され、又は仏教化されたつづ農事の予祝と併せて仏祖の生誕を祝うにふさわしい日となつて、今日の「花まつり」と呼ばれるようになったと考えられるのである。

以上、仏教の花まつりが農民の生活から始まった素朴なお祭りを踏え、それを吸収して今日の如く発展して来たのを知つたのであるが、これを通して考えられることは、仏教の伝道がただ高尚な哲理や教理を振りまわただけで一般民衆の中に融け込んで行つたのでもなく、又特定の高僧だけの力で伝わつたのでもない。むしろ民衆の生活と直結したものの考え方をうけつぎつその伝統を尊重しながら静かに仏教のおしえが民衆の中に拡まつて行つたのではなからうか。



父は奇蹟だと言った

安居 香山

(大正大学講師)

やわらかな春の陽が、野原一杯にみち、菜の花や、れんげ草が、美しい絨綴を敷きつめている。それでも、時々、伊吹おろしと呼ばれる冷たい風が吹いているのは、まだ春が浅いからであろう。

餓鬼大将づらをした少年が、二三人の友達を相手に、小学校のまわりの土手を登り降りして騒いでいる。もう春休みとあって、朝から家を出たままである。

一台の馬力ぐるまが、ガラガラと砂利道を進んできた。狭い道である。子供らは一斉に土手の上に駆け登って、馬車をよけた。

「アツ」

誰かが大きな声で叫び声をあげた。

「伊三やんが、車にひかれたぞオ」

又誰かが叫んだ。馬方はびっくりして、馬をとめ、車の方に走り寄った。紺がすりを着た少年が、其処にうずくまっていた。この少年は、どうしたはずみでか土手から下り落ち、鉄の車輪の下へ、足を滑り込ませたのだ。紺足袋の親ゆびの所が、鮮血ににじんでいる。

「先生、大変だ。伊三やんが車にしかれたよ」

宿直の先生が、慌てて飛びだして来た。そして、ウンウン唸っている六年生を背負うと、小走りに村医者のもとに駆けつけた。

「大したことはない様ですね。幸い、骨は折れていない。」

村の医者は、少年の足を、あちらこちら見ていたが、骨が折れていないことを確かめると、消毒して、繃帯をした。先生は、その少年を背負って、半道の所にある少年の家に連れ

帰った。

「幸い、骨折はしていないようですから」先生は一部始終を話し、心配そうな母親を安心させて、帰って行った。

○

この少年というのは、実は私なのである。今から、もう三十余年も前の事で、私が小学校三年の時であった。伊三郎というのが幼名であったので、皆は「伊三やん」とか伊三はんと言った。滋賀県の方言である。

その後、私は、新学期が始まって、まだ足が痛んでいた。母に背負われて、しばらく学校に通ったことで、記憶にある。しかし、幸い足はそれ以上悪くなることもなく癒った。今でも別に何でもない。ただ親指の爪だけが、今になっても、しびれたようになっている。鉄の輪と砂利の間にはさまれ、足の甲羅を踏みつけられたのであるから、骨折するのが常識であったが、どうした加減か助かった。皆も

「よく助かったなァ」

と感謝した。

しかし、この不思議をそのままに認め切れなかったのが、信心深い父であった。

「何かが、助けてくれたのだ。これは奇蹟的なことだ」

父は、そんな事を考えながら、常日頃、念じている仏壇の

阿弥陀如来を、人知れずそっと取り出し、縁側に出た。家には本家と分家の一尺近い阿弥陀如来の立像が祀ってあった。

両方とも取り出してみた。ところが、分家の如来（父は分家であった。）の足の一方が、ペシヤンコに見えた。それは、

私がひかれた足と同じ所であった。

「おい、一寸きてみてくれ」

父は大声で母を呼び、二人でよくみた。確かに、足がペシヤンコである。母もまた大へんな念仏信者であった。二人だけで信じられないので、早速、菩提寺の住職にみてもらった。上田純教老師である。老師もこの事を認めた。

「こりや阿弥陀様が身替りになって下さったに違いない」老師は感謝して、十念し、手厚く祀るように言って帰った。狭い村のこととて、この話は、パツと拡がった。毎日のように村の人々が替る替る拝みに来た。

○

こうした経緯は、それ以来、詳しく何回も父から聞かされた。もう此の世にはいないが、何かある毎に、

「如来に助けられたおまえだ」

と父は私に言った。そして

「確かに奇蹟だ」

と喜んでいた。その当時、百姓の子であった私は、京都の某

寺に弟子入りすることがきまっていた。それは、村でも評判になっていた。父は、私が仏門に入る喜びを、よく風呂の中で話した。そして、これにより、「九族」みな救われる功德を説いた。父の浄土教養については、仲々深い理解があった。村に来る説教師から聞いたものが主であったが、又自分でも研究していた。

勿論、そんな事は、十才そこそこの私には何も分らなかった。奇蹟ということも、念仏の功德ということも。ただ正直なところ、今にして思うと、京都に行けることが、此の上なく嬉しい事であったようだ。その当時、村から京都に行くことは、花の都にもものぼる心地で、皆から羨しがられた。父は、この仏弟子になるという事と、その時の奇禍とを結びつけていた。そして、仏弟子となるこの子が、弥陀に救われたと信じた。「奇蹟だ」という事は、

「弥陀が守ってくれたのだ」

という事であった。そして、それを信じ、又子供や人にも説き、喜び、念仏に励み、そして、終生それを信じて、死んで行った。

弥陀如来の足は、それから十年程もたって「申しわけないから」ということで、父は仏具屋に修理させた。私は、修理前のペシヤンコの足がどんなであったか、記憶が無い。今、

みてみても、もう分らない。

○

「これは奇蹟だ」

と言った父の説明に対し、私は、肯定も否定もしなかった。青年期に入った頃、こうした考え方に対してある反撥も感じてもいたが、特に父に対して反論することもしなかった。父の信念に対して、如何なる反論も無意義と考えていたと共に、又そうした態度を取ることが、父に対する道であるとも考えていたからである。

一体奇蹟とは、予期しない事が突然に起り、それによって人間業では考えも、出来もしない事が、可能になったことを指しているのであろう。そして、これが宗教的な理解の上に立つときは、人間業ではとても不可能と思われることを可能にしてくれた何者か、他の大きな力がそこにある事を予想することとなる。父が、私の奇禍を奇蹟としたことは、「弥陀の力により、助かるまじき子供が助けられた」という理解であり、更には信仰であった。

しかし、この奇蹟ということも、信仰という事を無視するとすれば何とでも説明できる事であり、其処には何の「奇」と称されうるものはないこととなる。私の足が骨折せずに済んだ事も、うまく車輪と砂利との間に入ったからに過ぎぬか

も知れない。しかし、それは後でつけた理窟であって常識的には可能とは考えられない事である。この人間の常識では考えられないことが、実は、奇蹟と言われる理由なのである。

人間が感覺的、知覺的に知り得る事などは誠に浅いものである。後で、理窟はつけるものの、現在の行動の一寸先が、果してどの様になるかは、何も分らない。前起った事についてそうなったかも知れぬことが多い。まさに「一寸先も後も闇」である。いうなれば目先のきかぬ「はかない」存在なのである。如何なる合理主義者も、その「はかなさ」においては、同じである。有限な、はかない者が無限な絶対なものを求めるところに、宗教のきざしがあるといえよう。

その様に、宗教的奇蹟は、ある出来事が、人間の思慮の範圍外において起るとき、これを他の何者かの力と信ずることにおいて言うもので、父の場合、これを「奇蹟」だと言った事は当然のことがあろう。そして、私も、はかない人間の一人である故に、これを奇蹟と受けとるより外に、理解しようがない。その当時は別として、現在、念仏門徒の一人として生かされているこの私が、父と同様に考えることを、私は何の躊躇もしない。

しかし、この頃の新興宗教は、盛んにこの奇蹟を言う。更には、奇蹟を売りものにして、宗教の宣伝をしている。創価

学会などは、特に甚だしい。例えば全く奇蹟なのであるが、医学的に癒らないとされているガンまでが、「おまんだら」を拝む事によって、癒るというのである。そして、それは奇蹟を予想しての唱題であり、奇蹟を売りものにしてゐる。しかも、常識では、全く奇蹟的なことが、当然のことのように可能になるというのである。これでは、最早や奇蹟といわるべきものでない。又、果して信仰というものが、こうした奇蹟を予想し、目的としてのものであってよいのであろうか。

もし、奇蹟というものがあるのであれば、それは、信ずる者に支えられるものであり、ある事が奇蹟と信ぜられるものであって、決して自分の力で得たり、又それを目的として、信仰するものでないと思つてゐる。私が助けられたと考えることは、父の信仰があり、その父の信仰により、私に与えられたもので、父や私によってそれを目的として勝ち取ったものでも何でもなし。しかし、この私に今後も又そうした奇蹟が、与えられるとも、取り得るとも考えない。とても、そんな自信はないのである。ただ、先にも言つた様に、奇蹟を求める為に、信仰を持っているわけでもなく、又持とうと思われない。しかし、そうしたものが、この信心浅い私にも与えられるというならば、やはり、喜んで頂くつもりがある。はかない人間として、此の世に生を受けているのであるから。

正 僧 定 徳 間 漆

高 橋 良 和

(中外日報社取締役)

今から数える

と十代ぐらい前になるかわからない。いやもっと前かもしれぬが、知恩院の執事長に漆間徳定僧正がいた。

何分にも若い

頃であつたから当時相当な御老体のこの老僧正のところなどへは一寸伺うことも出来なかつたくらいだが、知恩院の執事長になられてからよくその執事長の部屋に参上した

ものであつた。

漆間僧正はその昔井上姓を名乗られたのであるが、その後岡山県の誕生寺に住職されて宗祖法然上人の誕生寺であるところから漆間姓を名乗られたのではないかと思うのであるが、御法嗣の正徳さんが現在、このゆかりの誕生寺の住職であるから詳しいことはそちらにおたずねした方が早いかもしれぬ。

この漆間僧正はなかなかの詩人であつて、とくに今様をつくられてなかなか立派な名作が数多くあるが、ことに法然上人の謡曲の新作を発表して、宗祖の顕新運動をされたのは印象的であつた。

さてその一つの運動に漆間僧正作の「法然上人恵月影」という人形芝居がある。これは法然上人の幼時勢至丸の当時、源内武者定明の夜討のところを義大夫にしたもので、当時凡そお坊さんの人形芝居など誰も手をつけなかつたときに、堂々とこの新作を発表したのであるからみんなおどろいたのである。

この老僧正なかなかその辺は上手に立ちふるまって、これが見事文楽の人形芝居にとりあげられたのである。

その当時の文楽の人形芝居は今の大阪道頓堀の文楽座で

もなく、その前の四つ橋の文楽座でもないので、御霊神社の境内にあった文楽座であるから、話は古いことで、大正十四五年前後である。

何分にも文楽人形の新作など考えなかった時代の企劃であるから、文楽も一寸首を傾けたのであるが、この老僧正といつては当時叱られるかもしれないが、その熱心に感心して、いよいよこの上演を決めたのである。

これを聞いた浄土宗の大阪寺院はもちろん京都の各寺院でもその「法然上人恵月影」の人形芝居のために連日大阪の文楽座に出かけて観劇したものであるから、文楽座は全くの超満員で、ほくほくで毎日大入袋が出てなかなか好調であつたのである。

さて何日かのこの新企劃による興業は見事成功して、いよいよ千秋楽となつた日のことである。

この大入満員の客をおくりだしたその夜のことに、この文楽座から出火してまたたくうちに同座を全焼して、さしも古い歴史と人形芝居を誇つた大阪名物の文楽の人形芝居も何一つ取り出すことが出来ず灰燼に帰してしまつたのである。

話はこれですむなら何のことではないのであるが、その火

事のあとに、ただ一つ残つたものがあつたのが不思議である。

それはこの「法然上人恵月影」に使つた、法然上人の人形の首（かしら）だけがただ一つ楽屋に焼け残つたといふのである。

焼けた文楽座に残つたのは法然上人の首一つであるから座の関係者もこれは法然上人の崇りだとあらぬ噂をたてたのであるが、それはそれとしても、その後文楽座では二度とこの法然上人の人形芝居の上演を禁句にしたといふことである。

このことは漆間僧正が直接わたしに話してくれた話であるが、わたしは今その「恵月影」の脚本を手にしてこの老僧正が劇作家としても非凡の人であることをつくづく知つたのであるが、こんな思出などはこの老僧正ならではの痛々しい語り草であつたと思うのである。

この老僧正は鼻に特長があつてシラノドベルジュラック型の大きな鼻が印象的であつたし、あのひびきのある声もさすが布教界の第一人者であることを思出すのに充分であつた。岡山県の誕生寺、美作のこの宗祖の誕生寺の復興をやりあげた努力にも、忘れ難いものがある。

信仰と現代病

— 病院こぼれ話 —

小野 泰博

(大正大学講師)

手品を見る面白さは、タネがあると知りながらも、まあ、だまされてしまうおかしさである。われわれがいまこうだと信じて疑わないうことにも、ただ私が知らないだけでカラクリがあるのかもしれない。そしてあるときにはそのカラクリを、明確に認識することが必要だし、またあるときはそのカラクリをなまじく知らないことの方が人生はたのしいのかもしれない。

一、本山まいり

信州大学医学部の紹介状をもった患者が東大病院外来を訪れる。型の通りの診察が終る。病状は、まさに紹介状に記されている診断通り。とられている処方もまさに適正。医師は疑う。何のためにわざわざ金と時間をかけて東大へ来るのか。紹介状を出された病院の教授の顔が浮ぶ。うちの教授とは同じ大学の学友、学会でも高名の学者である。診断に間違いのあろう筈はない。それをなぜ東京に来るのか。教授はよく冗談まじりに、若い医師たちにさとされる。

お前たちが患者を治したなどとゆめゆめ思

うな。治したのは「東大病院」という名前である。

東大病院の先生に診てもらったという安心、そこで処方されたという自信、なんのことはないそんなものが病気をいっそう快方に向わせる。恐ろしい権威信仰がここにも生きている。科学プラス・アルファとは何か。

「手のいほを治してくれと真剣に訴える患者に、まじないも案外ききますよ、やってらごん」

とさとされる。

二、諸国詣で

慶応病院へもいった。ライ病院でも診てもらった。なんともないといわれた。だけど自分分は安心できない。誤診ということもある。是非もう一度、精密検査をしてほしい。自分はどうもレブラらしい。かくて、内科なり、外科なりを経て、精神科に廻ってくる患者がいる。大変な確信である。自分はレブラだ、やがて発病して、廃人になるのではないか、という一念と生きて二十年。いまでも週期的のように病院めぐりを続けている。まさに執拗

なまでの執念である、というよりこの病氣と仲好しになって、この病氣なしには暮せなくなっているのかもしれない。そしてドンキホーテではないが、この仮空の敵との闘いが唯一の生き甲斐かもしれない。無駄だ、愚かだと悟しても無駄である。訂正のきかないのがこの病氣の本体だから、レブラ・フオビア（癲病恐怖症）という診断名は何も解決していない。どうしてこんな頑固な信念体系が生まれるのだろうか。

三、五具足

「脳波とかいう器械で、うちの子の頭の中をすっかり調べてやって下さい。」

と注文する。児童相談に見える母親の気持はわかるが、何か検査器具にかければ、知能から何から、すっかりわかり、かつ治ってしまうという信念には辟易してしまう。脳波でよくわかるのはせいぜいテンカン系のもので、分裂病や精薄児の検査にすぐ役立つとは思われない。

聴診器も使わず、瞳孔反射や四肢の反射など、トントンと簡単に終る神経科の診察では

交わすことばや、態度がいかに大事な診断基準であるかがわかってもらえない。とにかくいかめしい、複雑そうな器械器具にとりまかれないうと診てもらっている気がしないのである。病院とは痛い目や、苦い薬を飲まされるところと観念している。恐ろしい条件反射である。したがって、弁護士には莫大な金をとられるのに、半時間も、一時間もかかって診察し、治療してくれる精神科医に

「あれはただ話をしただけだ」

と、金を支払うことの不都合をこぼす。考えてみれば不思議な話である。

一時間七百ドル、二千ドルととるアメリカの精神科医はともかくとして、ことばによるコミュニケーションの下手な国民とはいえ、人間が人間だけにできる治療方法、ことばによる治療をもっと尊重する必要があるまいか

四、御神水——特效薬

ガンにほんとに効く薬があるのです。医学会がこぞって、某博士の説を頭から否定してかかるのは、実は大学教授などと威張っている先生方が、自分で発見できないものを、名

もない医師に先に見つけられてしまったのを押えようとしているのだという。いまでも、信州のどこかに住むという某先生のもとへ、その秘薬をさすかりにゆく人のあとは絶えない。学会がどうたたこうと、世論がどういおうと、もしやという願いを頼みに出かける。だめだったとしても、もともとだという。大阪までたとえ一時間でもよいから来てもらいたいと、航空機を差向ける人もでてくる。不思議な信仰だ。ひそかな秘薬への風説は口から口へと確実に広がっていく。

五、極楽マンドラ

ある郊外の病院に、もう何年越して入院している七十近いおばあさんがいる。もとは何の病氣だったか、いまは老人性痴呆と記されている。痴呆は精神薄弱と違う。前者は一度ある知的水準にあった人が何かの障害のためその水準が落ちたものであり、後者は始めから発達の遅れたものである。

さて、そのおばあさんは、外来者を見て勢至菩薩のお越したとまともに話しかけてくる。看護婦さんが善導さまだった。病院の先

生が阿弥陀仏になったりする。とにかく自分の廻りに生きて動く人が、すべて仏の名前であったり、浄土教にでてくる人物である。

「あなたさまは熊谷蓮生坊であらせられる」と、よどみなく、子供の頃耳にした真宗信仰の物語がすらすら口をついて出てくる。まさに病院の風景がさながら浄土変相図なのである。

身の廻りのことはひとりで処理でき、いつもにこにこ妙好人さながらの、身ぎれいな、品のいいおばあさんである。患者としては扱いのいい患者である。ただあまりにも精神の世界が浄土へゆきつきりで、ひとときも現実界へ帰ってこないのである。ただそれだけである。ほんとうにさめない夢を見続けているのだろうか。

創価学会の批判的解明 (全日仏発行)

創価学会の実体調査に基づいてその教義と現況を解剖批判、仏教会話題の本書によって学会からの不安一掃(¥一五〇〇千五〇〇)

申込先 法然上人鑽仰会

労をはぶく

ある人が道を歩いているとき、けつまずいて、ころんだ。やっとおきあがって、いくらもいかぬうちに、どうしたとか、またころんでしまった。

その人は、カンカンになってののしった「畜生め、こうと知っていれば、おきあがらないでいたのに」

虎の皮

ひどいけちんぼうが、ある日、虎におそわれた。虎は、男をくわえたまま逃げた。息子が弓をもって後を追ひ、ひきしほって、いまにも矢を放そうとすると、くわえられながらこれを見た男、あわてて叫ぶ。「もっと下だ、下だ。虎の皮が傷物になっちまうではないか。」

面の皮

「この世の中で、一番かたいものは、なんだろう」
「そりゃ、鉄さ」
「鉄は火にとけるよ」
「じゃなんだ」
「ひげだよ」
「えっ!!」
「そうさ。ひげは、どんな厚い面の皮でも通すじゃないか」

一口笑話



千手観音

床屋の新米小僧、人の頭をあたるとき、うっかり傷をつけ、あわてて指でおさえたが、

また一そり傷をつけて指でおさえ、またたくまに五本の指が足りなくなってしまうた。

小僧なげいて、

「ちえっ 頭を剃るのはこんなにもむづかしいものか。千手観音に生まれてこなくちゃだめだ」

(中国の寓話より)

◇ご法語をいただく◇

げにも凡夫の心はものぐるひ、さけにえひたるがごとくして、善惡につけて、おもひさだめたる事なし。一時に煩惱もまたびまじはりて、善惡みだれやすければ、いづれの行なりとも、わがちからにては行じがたし。
(勅修御伝第二十三)

「げにも」とはいかにもその通りという意味です。これは弘法大師が凡夫とは狂酔の如しといわれた言葉を引用し、弘法大師のいわれた通り凡夫。心はもの狂い。酒に酔った者のように、ものの善惡を思い定めることができないと申されたお詞であります。

念仏信仰と凡夫とは切っても切れぬ関係にあります。念仏を唱えるには、阿弥陀さまの本願を深く信じての上で唱えることは当然ですが、それと同時に自分はいくまで凡夫に過ぎないのだという反省があり、かく深く信ずることが大切であります。

「はじめには、わが身のほどを信じ、のちに、ほとけの顔を信ずる也」

といわれたお詞のわが身のほどとは、わが身が凡夫にすぎないということの意味であります。そして凡夫とは狂い酔った心を持つものであるから善惡の区別がたたないということとであります。しかもその上に百の煩惱が一時に襲い来って頭の中は善惡入り乱れて渦をまいていくといわれました。

煩惱は心身を悩まし乱す精神作用であって百八煩惱とか八万四千の煩惱とかいわれる通り数知れぬ多くのものがあります。しかしそのもととなるものは貪り、怒り、慢心、疑心等であります。そしてこれらは別々にあるものでありません。例えば怒りについて、何故怒りが生ずるのかといえ、自分が他より優れているという慢心があり、他人を信用しない疑心があり、その上に何事にも不平不満を抱く貪りがあるからであります。従って煩惱というものが、幾つもの煩惱が重り合って同時にふりかかってくるものであります。

行とは普通に行爲のことで、善行にしろ悪行にしろ後になって必ず善果となり又は悪果となる原因をなすものであります。しかしここでは修行のことで、仏となるために菩提心

をおこし、煩惱を断って難行苦行をするという諸善万行のことをいいます。仏教に八万四千の法門があるということは、それだけ多くの修行の道が説かれているということとあります。

このようにいかに修行の道が多くあっても、修行をなす人間が凡夫であっては望んでも行じ得ないものであります。善いことだと思っても素直にそれに進むことができず、悪いことだと思っても即座に止めることが難しいような凡夫の身であってみれば、折角の仏道も高嶺の花といわねばなりません。

そこでこのご法語に続いて次の如く申されています。

「弥陀如来この事をかなしみ思しめして、法蔵菩薩と申ししいにしへ、われらか行じがたき僧祇の苦行を、兆載永劫があひだ、功をつみ徳をかさねて、阿弥陀仏になりたまへり」

そして阿弥陀さまは「十声一声までも、となへんものを、かならずむかへん。もしむかへずは、われ仏にならじと、ちかひ給へるにかの仏いま現に世にましまして、仏になりたまへり」という仏さまであります。(村瀬秀雄)

死刑囚を教誨する

み仏に活かされて

乙 山 如 雲

(刑務所教誨師)

教誨師を志す

越後の草深い、田舎寺の次男坊に生れた私は、生来引込み思案で田舎言葉で、口べたなので、人にものを云うことは極めて不得手な人間が、教誨師になりたいと云い出したので、家族は驚き且つ反対したのも無理はない。しかし私は、遂に初志を貫徹して、今日まで三十八年余、この道を歩いて来て、自分の微力だったことは感ずるが、いささかの悔いはない。それは何故か。

折角尊い仏縁により、寺には生れたがお葬式や法事に追い廻されたり、口先きだけのお説教師にもなりたくない。こん

な気持の時、たまたま読んだのが、倉田百三氏の「愛と認識との出発」とか、死刑囚、山田憲氏の手記「信に生きた人」等で、宗教家としての生き方、在り方等を考えさせられ、私はこの道を選んだのである。

そこで先ず考えたことは「自信教人信」が原則であることである。それから本気になって求道に専念した。仏教書は勿論、基督教その他の宗教書、哲学書等々、読む、聞く、そしてその人にぶつかってみるという三つの方法で、一方その頃可愛いがってもらっていた祖母が死ぬ、たった一人の姉が早逝する等々で「人間と死」という問題に直面させられている時、私の心に一番強く響いてきたものは「歎異抄」でありました。

就中その第一節

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば　とぐ
るなりと　信じて　念仏　もうさんと思いたつ心の　おこ
るとき　即ち　摂取不捨の利益に　あづけしめたもうなり
云々

この地獄以外に行き場のない私が、弥陀の本願を聞かせて
いただき信じさせていただいて途端に、救われる信が確立す
る。安心がある。感謝がある。そして希望が踊る。

親鸞聖人は御和讃に

超世の悲願ききしより

われらは　生死の凡夫かわ

有漏の穢身は　かわらねど

心は　浄土に　あそぶなり

と仰せられています。信仰はお浄土への道中なのであり

ます。恰かも子供がお祭りや遠足、修学旅行の日がきまると
何日も前から楽しいようなもの。

それから「死」の問題については、同じく「歎異抄」の第
九節に

久遠劫より　いままで　流転せる　苦悩の旧里はすてがた
く　未だ　生れざる　安養の浄土は　こいしからず　そう
ろうこと　まことに　よくよく　煩惱の興盛に　そろろう

にこそ　名残り惜しく思えども　娑婆の縁　つきて　力な
くして終る時には　彼の土へは　まいるべきなり　云々
いかにありがたい尊いお浄土でも、人間としてこの世にあ
る間は、肉身の愛情その他に心ひかれて、急ぎまいりたい心
は起らない。併しいかに何とも思うても、力つきてどうにもな
らなくなった時、行く先まっ暗だったらどうでしょうか。
世の多くの人々は臨終のその時まで、心にもない口先きだけ
のなぐさみ言葉で、ごまかしていかないでしょうか。

愛児の臨終に「お父さん　わたし　死んだら　どこへ　ゆ
くの」と、突然問われて当惑したという話がある。親とし
てそれですまされるでしょうか。私は前述のように祖母と姉
の臨終に遭遇して、骨身にしみて感じさせられたことは「歎異
抄」第九節の、力なくして終る時に彼の土へはまいるべきなり
の境地であった。お念仏に活かされている者には、暗い死滅
はないのだ。明るいお浄土へ往生させていただくのである。
少し考える人であるならば、先きの見透しをつけてから事
をするのが、最も賢明な行き方であることは、わかりきった
ことであるが、死んだ先きの見透しをつけて、その日その日
を安心して生きている人が、どれ位あるだろうか。死の問題
を解決しないで、生の問題、否人生の解決策があるでしょう
か。「人生」それは「生と死」に外ならないと私は思う。

死刑囚と対決

死刑囚の手記を読んで、この道に入った私ではあったが、いよいよその現実にあつたのは、昭和七年長崎刑務所であつた。その第一号は強盗殺人で二十五歳の青年で、私は二十九歳頃だつたと思う。丁度弟のような感じで接した。総ての人の命は今晚にもわからない。儚いものなのであるが、世の多くの人は、そう切迫しているとは思ってはいない。まことにおめでたい話ではある。

併し死刑待命中の者は、それこそ今日か明日かの緊迫した毎日、従てこれとの対談はいいかげんな、なぐさみ半分の言葉では、にごされない。文字通り命がけの体当り、精神をすり減らす体の話合である。

而も宗教人でなくては、解決されない場である。独房訪問の対決が続けられた。そしていよいよ執行の日が来た。刑場はものものしい警備と緊張。所長は厳然として

「これから大臣の命令により執行する」旨言い渡す。後は教誨師である私の最後の教誨であるが、生れて初めての場、曾て読んだり話で聞いたことはあったが、現場で而も責任者としての立ち合いということになると中々重大、いましばらくでこの弟のような青年が死んでいくのかと思うと、胸がつ

まり、口中は渴き、中々言葉が出ない。警備の者は大ぜいと巻きついて見守ってはいるが、誰れ一人、身近かに寄る人はない。肅として声がない。私もいつまで無言でもいられないので、彼の身近かに寄ってとっさではあったが彼の手を握った。そして漸くわれに還って、いよいよお別れの時が来た。併し仏語に「俱会一処」とある通り、またお浄土で笑って会いましょう。先きのことは予てお話ししてある通り何の心配のないことを告げて、彼の肩を軽くたたいてやったら、にっこりうなずいて、周囲の職員にも長々お世話になりましたと、お礼の言葉を述べた。後は目かくしをされて、三間ばかりの距離を職員のかいぞいで歩くのですが、平常と何ら変りない落付いた足どりで、その間お念仏して、絞首台へ、台上に立つとお念仏をやめて、国歌「君が代」を歌い出しましたが、時間となつたので途中で終つた。それこそ文字通り、従容として死についたのであつた。立ち合つた大勢の人々は、感歎して、あの若さで何という立派な最期だろう。われわれがあのような態度がとれるだろうか、互に顔と顔を見合いつつ、ささやき合つたことである。舞台での演技であれば、何回もやり直しをして、うまくやることも出来ようが、この場合はいきなり本番である。そうさせたものはみ仏の力以外にないことを私は皆に話したことである。宗教が人間にとり、

信 通 者 読

いかに重要な役割をもっているかを、眼前に見せる唯一の場である。「仏心は大慈悲是なり」とありますが、単なる言葉や概念ではなくその大悲がこの私を通して、彼れ死刑囚に徹到したからであります。仏はこの眼で見るものではなく、冷暖自知で触れてみないことには、感得出来ないのであります。それは聞信して初めて体得し得るものであります。生きているみ仏に、私と死刑囚が活かされた実感であります。人前でろくろくものも言い得なかった私がこんな困難な場に入って四十年近く、歩み得たことはこれ偏にみ仏のおかげとただただ感謝、感激に堪えないのであります。

法然上人ファンののはしくれですが、称名念仏のおかげさまで、毎日希望と感謝と反省で浄土宗の尊いことを喜んでおります。

大なる人の躁音にまきこまれず

小なる人に針をさされることをおそれない

み仏に正しい判断を授けて戴いております。本年七十才、心身共に幸せな日暮しを感謝いたします。

憂きこともつらきことをも安らかに

忍ぶは弥陀の御慈悲なりける

(五十年前二十才代の折)

佐賀県藤津郡塩田町 西岡 千代

表紙の解説

花かざりをつけた象

ハレビード(マイソール州)

四月八日は花まつり、花にかざられた御堂の中に、天地を指して立たれるおしゃかさまの像と、ハリコの大きな白い象の行進を、幼い日の思い出としてもっておられる方々も多いと思います。インドの動物と云うとすぐ思いうかべられるのが象で、昔から王者の乗物に、戦いの主要戦力に、一般の使役にと多く使われて来ました。

南インドのマイソール州に、ハレビード(古い町の意味)と云う小さな町があります。ここは、ムスリムが南インドを征服する直前、十二世紀から十三世紀に涉って栄えた、ホイサラ王朝の一つの中心で、その時代に建てられたいくつかのヒन्दウー寺院が残っています。これらの寺院は上から見ると、丁度、星の様に、いくつかの角を持つ独特のスタイルをしており、堂の内、外壁には精密な石刻がほどこされています。特に外壁には、ヒन्दウーの諸々の神、獅子、象などが、或は物語風に、或は単独にこまかく刻まれ、それらをかこむ装飾模様と共に、層をなして建物をとりまいていきます。ここにあげた象も、その行列の一部で、高さは三十センチにたりないほど最下層にありますので石はうすく黒くよごれてしまっていますが、豊かな装飾と共に、今も昔もこの動物が人々になじみの深いものだったことを表しています。

(撮影・解説・佐藤良純)

悲劇の英雄

織田 信長

林 左馬衛

(宮内庁・図書寮)

思ひねの床の山風さえさえて

涙もこぼる片しきの袖(眺望集・冬恋)

織田信長の歌として、川田順氏が、戦国時代和歌集に拾採された、四首の中の一つである。信長について考える時、この歌が常に、ほくの念頭を去らない。

連歌だったものか、和歌だったものか、それさえ、ほくにはよくわかっていないので、

批評するのもおかしい様だけれども、念頭を去らないだけの内容は持っている歌なのだと思う。義理にもうまいとはいえないのだけれども、歌の教養の埒外に出て、ふしぎな説得力をもっている。そこに——、ほくはほくに作者の精神的な異常さを感じている。

冴えて冴えて吹く夜嵐。まんじりともせず、に灯火をみつめていると、一人の人の姿が、心の中にみえてきそうになる。しかし信長はそれを許さない。ふと、眼がさめている。短くなった灯蕊がじりじりと音たてているのは、残り少なくなった油脂のせいであつたろうか。涙が凍っている。誰も助けてはくれない。誰もいない——。広い部屋の中にとりこされている、孤独。淋しい……。

淋しい——、しかし、その透りぬけた世界の果にある一種の恍惚感——を、信長はねらっている。詰めて詰めて詰めぬかれた後に、ふとむかえにくる、いわば彼岸ともいうべき、あのきよらかな次元の確かさ——が、信長にはわかっていた、のだと思う。つきつめていうならば、それが、人としての、信長の不幸であつた。

この——、歌の対象として想い描かれた女性、具体的な誰であつたかは、わかっていないが、女歌であるからには、それがあつた筈だと思われる。もっとも、その具体的な女性のむこうに、女になった信長がちゃんとすわっているのだから、あるいはそんな具体性なしに、自分に訊うようにして作った歌だったのかもしれない。いずれにせよその女性に、信長は酷しい恋を要求しているのである。

歌に、信長がのりきって、ものすごい速度で迫ってくるのは、それだけ、信長が真剣な素顔を露呈してしまっているからであろう。信長は、この歌に堪えぬいてくれる玲瓏玉の如き女性を、心の中に要求していたのだ。もし、そうであるとするならば、信長は、やはり必要以上に不幸を求めて生れついた、悲しい人——であつたように、思われてならない。これから、恋愛を始める、そこに、なおれノというような具合では、どんな女性であっても、必ず逃げ出してしまふであろうが、信長の歌には、そうした激しさが、秘められているようである。

存外、そうした気配から察して、人々は、

信長の男色嗜好説を信じているのかもしれないが、これは、おそらく趣味嗜好の問題ではあるまい。信長は、男も女も、いや、根本的には自分自身さえも許さぬ、依怙地な人であった。だから、そのきびしいふるいにかけられて残った人が森蘭丸の他誰誰であったか分らなくなってしまうと、蘭丸までふくめて、誤解されるようになったのだ、と思う。根は、心がきれいすぎたことから起った誤解である。過ぎたるはなお及ばざるがごとし——という悲劇が、ここにも透けてみえる。

織田信長は、心のやさしい武将であった。それは茶会記の側から彼をみつめているほくにとつて、否定できそうにない真実である。サービスが好きで、配慮が細やかだ、気をよくしたとなると人々があつけにとられるほどの無邪気さを露呈する信長は、決して人を裏切らない人でもあった。その本然のよさを解しえたものが、かの鬼武蔵・森長可の子らの他、幾人もいなかったとしても。人々は、決して反則を冒したことのない、いつも後手にまわって苦勞している信長を、知らないわけではなかった。勝負の決め方がはやかだったこ

とと、裏切られて常軌を失した時の逆上ぶりの影にかくれて、信長のよさが認められていないきらいがあるが、ただ強いだけの氣狂いであつたのならば、天下を動かし、日本史のあり方をふかい所から変質させてしまう仕事は、できなかったものとしなければなるまい。信長の欠点は、必要以上に人の心の中にツケツケと入りこんで、自分でも動きがとれなくなってしまう性向にあつた。親切が出发点であつたのだが、結果的に人の迷惑を招いてしまうことは、世にありがちなことである。調子づいたとき信長は、すべての人が自分と同じ規準でものをみているような、高貴な錯覚にとらわれることがあつた。いつも、そうだったのではないが、やはり本質的な面で、どこかに、自分と同じ他人のあることを要求している怖さが、信長にはあつた。

人々は信長の中に、俗人を絶対に近づけてくれない、悪くすると自分を俗人の醜さにおいおとしてくる、絶望的な妥協性のなさを見た。そしてそれが、純な人なつこさに裏づけられているのだと分りながらも、どこかでそれを怖れ、憎まぬわけにはいかなかった。

信長が、茶に近づいたのは、それが、美しいものを尊ぶ純粋な遊びだと信じたからであつた。古い文化に対して、コンプレックスに似た憧れをもつ信長は、京の文化人よりも堺の数奇者の方に、なにか本能的な親しきを感じていたが、その感情とはうらはらな、唯美への悲願をこめて、茶にむかつていったのである。慎重に、しかもおずおずと、茶人たちの交遊を求めていった信長は、史上最大の名物狩りを終えたばかりで、本能寺の露と消え果てたのだから、彼の心の中に完成した本当の茶をとすることは出来なかったが、茶湯政道という全く奇抜な政策を、死後なお日本の国に残したことによって、また、織田信長なる具体的な巨像を茶道史上の問題として投げかけたことによつて、日本茶道史のありかたを、どんなにか清く大きな世界に導いたことか、けだし量り知ることのできないものがあった、と思われる。

もっとも信長がもう五年も長生きしたら、といつめられた茶道史がどうなっていたか、わかったものではないという氣も少々するのだが。

信仰の記録

私の念仏信仰

清水 勝巳

(浄土宗信徒)

はじめに

私が今からおよそ八年前の二十四歳頃、多少困難な病床にあった時、ふと考えたことが二つありました。一つは小鳥を眺むればスズメにも生れず、山を見れば松の木にも生れず、又海を眺むれば魚にも生れず、生れ難いこの世に一体何の為に生れたのであろうか。その二つは私がもしこのまま死に至るとすれば、和尚さんからも葬いをして頂くが、一体宗教とはなんであろうかと言うことでした。

私は一介の小商人にすぎず、日々細々とした生活を維持して行くにすぎません。従いまして家業も忘れてこの問題に没

頭して考えたのでもありません。しかし唯今生きていると言うことは、死に直結する道の上にあると思えば、和尚さんや伝道師、あるいは学者のみが研究すべき問題ではなく、むしろ私達がふかく考えて、決して不思議ではないと思いました。研究と言っても、手紙を書く時に忘れた字を字引きで注意ぶかく探す気持で、仕事の暇々に少しずつ考え、積上式で行ったのでありますが、八年後の今日、やっと私なりに結論を得ましたのでそれを述べたいと思います。

宗教とは

世の中には神道あり仏教あり、又キリスト教等もあります。外国にも色々の教義があります。これらを取りまとめて宗教と言っておるのでありますが、中でも仏教について述べたいと思います。

仏教にも法然上人を宗祖とした私達の浄土宗があり、真宗・真言宗・日蓮宗等とあります。たとえば法然上人の両親が誰であったのかを知ったとしても、それはさほど重要な意味合はなく、法然上人が私達一切衆生（人々）に何を教えられたかと云うことを、理解し理解しようとするその努力こそが、極めて大切であると思います。

仏法のまこと

私達が今日保っております生命は、心と肉体の二つから構成されております。しかし肉体には肉体の消耗に伴う食事の補給が鉄則であることを知り得るならば、心にも何か心の糧が必要であることを知り得ることも、亦当然と言わねばなりません。

法然上人が私達にのこされた一枚起請文に、次の通りあることに気がつきました。

「念仏を信ぜん人は、たとえ一代の法を能く能く学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同うして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」

この短いお言葉は誰でも記憶するところですから、時と所をきらわず、何も要らずに、何時でも考えることが出来ると同時に、これが私をして考えさせる唯一の基礎でした。このお言葉の中での「念仏と学問」——この二つに非常な注意がそそがれ、これを解くに私は八年もかかったと言えることになりました。

私達はオギャーと言う産声でこの地上に生命をうけるのでありますが、生れたばかりの乳児に知恵や人情等、わかる筈

はありません。わかることは空腹のさい、母親の乳をほしがり、泣く位のものでありましょう。

しかしだんだんと成長し、学校へ入学し、やがて卒業して社会人として各々の能力に応じて、生活していくようになるのですが、その過程に於て知恵も出来、人情も知り、また奉仕、感謝ということがわかってきます。両親をはじめとして、兄弟姉妹の愛情はいうに及ばぬところです。

そこで再び「念仏と学問」が私の心を大きくたたくのであります。世間をみるに、学問がなければ知恵がないかと言えば決してそうではなく、また無学の人が有学の人より成功をおさめている場合も、数限りなく実在するのも周知の通りであります。それでお言葉の中の「学」を理解するのに苦心致しましたが、結局これは知恵であると解けると信じます。

さて「念仏」とはこれが何時までもわかりません。しかし自分の体験と、先に述べました人間成長の過程において、人情、愛、奉仕、感謝等、さらにさらに深く慮いを廻らせた結果、慈悲と解けたものです。申すまでもなく、慈悲とは人情、愛、奉仕及び感謝のことであり、暴力や不正などがふくまれることは世界の何処にもありません。

すなわち仏法とは右半分は慈悲の心であり、左半分は知恵の心であると解き、かつ信ずることが出来るようになります。

た。

——私達一切衆生は、知恵の大きい人は、慈悲も併せて、自分を救い、家庭を救い、社会を救いなさい。また一寸の虫にも五分の魂のたとえの通りで、それほど大きな知恵がなくとも、慈悲の心に小さな知恵を併せて、自分を救い、家庭を救い、衆生を救いなさい——。これが法然上人が私達に与えられた教訓であると思います。

かりにこれが法然上人のみ教えてなくとも、常識的に理解出来ないものは、おそらく一人もいないと思います。七百年五十年前といえは混乱の世でした。法然上人は濁悪の社会で、濁に染んだ衆生が日々の生活に追われ、自己の利益に通ずるものに愛着し、氣にそわぬものは憎悪し、勝とうとし儲けようとして相争う、これらの苦悩する衆生を救う心の糧はないものかと、身命を投げうって求道に精進されたのであります。

言葉をかえれば——常識を以て有意義な人生を送りなさい——と法然上人は示されたのであります。これを信じ得ぬ者は、みずから進んで苦しみを求め、悪を求め、貧を求めているので、誠に不幸と言わねばなりません。私達が成程そうだと理解した瞬間から、法然上人は私達の心のまんなかにがっかりとおられることになります。すなわち仏はわが心にあり

と言えると同時に、仏法を信ずることにより、私達は一人のこらずみな生仏であることになります。すなわち法然上人のみ教えを信ずることにより、今もなお廣大無限に大慈悲心の光明が輝いているのであります。

仏法を信じて日常正しい行いをする者こそ、真の信仰家と言えるのであり、寺院に参詣する者のみが信仰家であるとは言いきれません。それならば寺院は不要なものになるではないかとの疑問も生じますが、私達の祖先の靈をお祀りしてある場であり、高い徳性、智性をそなえられた御聖徳によつて、より一層高い次元の人間になるように、心の保ち方やその方法を導いて頂く場なのであります。住職は私達が西方極楽浄土に成仏する時の、諸仏の光明を授けんが為めの特別職であります。もし私達が西方に成仏する時、和尚さんなくして成仏されれば、のこる家族は精神的に救われるでしようか。そこに寺院と聖職者の重要性があると思います。

法然上人は世の中には罪惡もうまると深く信じて、小罪をも犯さぬようにと強く戒められており、同時にたとえ十悪五逆の者も善人と同等に扱っておられますので、私達罪深い者も、まごころ、すなおな心、かざりのない心、すなわち至誠心を以て念仏を唱えれば、一年の四季が自然とめぐってくるように、おのずから心が和ぎ、豊かな人生を送ることが出

来ると教えられているのがわかりました。

人間の使命

天に輝く一点の星、地上に咲く一輪の花でさえ、各々がその使命をもっておりますが、生れ難きこの世に生命をうけた私達人間の使命は、仏法を信ずることにより自然とわかつてくるものであります。すなわち人間の使命とは人生の半分は自己の為に、のこる半分は隣人の為に奉仕すべきであるとかります。

かりにこの地上に唯一人生れたとしたら、果して生存が可能でありましょうか。私達は一人残らず隣人の奉仕をうけていることに気づかねばなりません。但し人生の半分以上を隣人に捧げるといっても、自分あつての隣人でありますから、無理にするのではなく、出来得る範囲内で奉仕をするという精神が極めて大切であると思います。

仏教の真理が、今日の社会上の諸問題と対照して何等喰い違ふ点がないのみか、今日の政治上、教育上かくべからざるものであり、人類社会の根本義であると痛感いたします。

靈魂のありか

私達は今日まで靈魂は不滅なりと聞いておりますが、私達

一切衆生が仏法を信ずることによって、法然上人は今もなお廣大無限の光明であることがわかってまいり、これがすなわち靈魂不滅なりと信ぜずにはいられません。

また私達の二十代前の祖先が、顔型及び姓名すらもわからぬとしても、目に見えぬことで有無を論ずることは早計ではないでしょうか。身近な問題として現存の親が、わが子に対して将来馬鹿になれ、人を殺して囚人になれと願う者は世界のどこにいらっしゃいますか。自宅から二十里の遠い発電所から、電流が通じて暗い部屋も明るく輝きます。がその電流をだれ一人見ることは出来ません。たとえ二十代、三十代前の父祖の靈といえども、廣大無限の慈悲心となつて、子々孫々にいたるまでそがれ続いていることは、誰も疑いを入れないうところであります。今日ここに生命を保ち得るのは、祖先の慈悲心の結晶であり、わが心中に光りかがやいていることに気がつきます。思えば悦びの中の悦びであります。

今日、私達が和尚さんに伴なわれて、家族うちそろい、供養を惜しまぬのは、一体なんの為でありましょうか。

自分の為にも、子孫繁栄の為にも、十方の諸仏、諸菩薩に念仏し、祖先に念仏し、自分に念仏し、また隣人に念仏し、明るく正しく仲よく生活を営んでゆく為に、ほかならないと思うのであります。

道綽大師と玄中寺

牧田 諦亮

(京大人文科学研究員 文博)

一

昭和三十三年九月十九日、この山西省交城県石壁山の朝のまだ明けきらぬ午前四時半、早くも寺僧による晨朝勤行が始まった限りあるいのちの我が身がこの次何時来れるか、再び此の寺に参拝できるか否かを思えばやはり一期一会の感に打たれて、高階瓊仙老師をはじめ、使節団の人たちも、何時しか僧房を離れて大雄宝殿(本堂)に参集した。中国の僧と日本の僧と、言葉は異なっても心は同じく、かたく合掌して仏前に勤行をつづけ、遠く曇鸞大師、道綽大師、善導大師の三高僧がこの玄中寺で修行し、講経し、布教されたそのいにしえを偲んだのである。午前九時には、この三大師画像の贈呈式が行なわれ、曇鸞大師——真宗大谷派、道綽大師——真宗の本願寺派、善導大師——浄土宗からそれぞれ贈呈された画像は、日本浄土教の発祥地としてのゆかり深い玄中寺の古

叢林という小さなお堂の中に祀られることとなった。これを受けてとった玄中寺住職象離法師も一九五八年には入寂され、その後、玄中寺に参詣した日本人の有ることも聞かないが、おそらく今日もなお玄中寺の法宝として襲蔵されているであろう。私達は、この玄中寺に二泊のち、九月二十日には再び太原に引き返したのである。寺で一行のために用意された記念の数種の拓本の贈呈を得た。その中に、唐の長慶三年(八二三)に建てられた「特賜寺莊山林地土四至記」があった。これは北魏第六主孝文帝(四六七—四九九)の治世延興二年(四七二)に曇鸞祖師がこの玄中寺を初めて建て、承明元年(四七六)にいたって成就したこと、その後の甘露義壇としての寺の発展などを記して、孝文帝や唐の徳宗、憲宗の三帝から寺が得た特賜の寺莊一百五十里有余の区域を明示して後日の混乱を避けようとしたものである。曇鸞大師が

承門元年に玄中寺を完成したという記事は、道宣の統高僧伝（巻六）に、大師が興和四年（五四三）に六十七歳で死んだと伝えている（従って、その誕生は承明元年となる）のとは大きな矛盾が生ずる。清朝の遺臣羅振玉氏旧蔵の、北齋天保五年（五五四）二月の敬造太子像銘に比丘僧曇鸞の名があり、統高僧伝（巻二十）の道綽大師の伝には「玄中寺は齊の時に曇鸞法師の立つる所なり」と記していることから、曇鸞大師の生卒年時についてはなお問題がのこるのである。

玄中寺現存最古の、北魏延昌四年（五一五）造像碑の拓本も、またこの寺の歴史を知る上に貴重な資料である。玄中寺が創建されてから四十数年後に、この附近の村民七十人が一つの信仰団体を結成し、その指導者である邑師の比丘法某が力を合せて上は皇帝陛下のため石仏像兩軀を造って天下太平人民和順を願ったものである。千数百年の後に、この玄中寺創建間もない頃の宗教活動の実態を示す遺物の現存することは、おそらく曇鸞大師の教化の一端を示すものといえよう。

曇鸞大師から約百年おくらせて出世した道綽大師（五六二—六四五）が、曇鸞大師亡きあとの玄中寺をもりたて、大いに西方浄土の教を弘めたことは後人のよく知るところである。この曇鸞大師から道綽大師への時代は、南方の梁では常軌を逸した武帝の崇仏が最も注目されるが、ことに末法到来の思

想が流行して、政治社会の混乱と不安の中に、危機意識が深刻に時代人の中に滲透していったのである。末法思想と浄土教との問題については、次号に記すであろう。道綽大師は、南岳慧思をはじめとする先師たちの末法へのおそれとおののきを身近に感じて、自らを救い人を救うに足る宗教として、曇鸞大師の浄土教をさらに発展せしめ、時機相応、機教相応の新宗教を提唱し、実践されたのである。

二

道綽大師、姓は衛氏、并州汶水（山西文水県）の人と言うから、おそらく幼少の頃から玄中寺のことも熟知していたことと思われる。恭譲の人柄をもって郷里に知られたという大師の少年時代の性格は、十四歳で出家して特に大槃涅槃經を宗として学ぶようになってからも、ことなりはなかった。涅槃を学ぶことは、当時の北シナではきわめて普通のことであった。北涼の曇無讖訳の大槃涅槃經四十巻の講義を二十四回もして北シナにその名を知られていた道綽大師はさらに山西省の中心地太原の開化寺の慧瓊法師について大乘空の教理を学び、ますます研鑽を深めたのであるが、たまたま玄中寺にあった曇鸞大師碑（今日では見出しがたい）を見、曇鸞大師の事蹟靈瑞を読んで忽然として、いささかの知恵分別をもってしては人生の苦海を渡りきることができず自分の帰入すべき

途は、ただひたすらに西方往生を願う弥陀浄土教の他にはないことを悟ったのである。曇鸞大師が浄土教に帰入されたのは、五十歳を過ぎてからであった。いま道綽大師も、曇鸞大師のような高德の僧にしてなお四論をすてて浄土教に帰入したのに感激して、涅槃經を棄てて念仏行者の生活に入られたのは四十八歳であった。もちろんこのような年になるまで浄土に帰入する機縁を持たなかったともいえよう。しかしそれ以上に、単信口称の凡夫といえども容易に往生できることを勧める弥陀浄土教の指導者として、このような年にいたるまで、当時の仏教学界の最高のレベルにまで学問をおしふかめて行つて、ようやく辿りついたということに、私たちとして深い反省の念をいだくものである。今日の仏教界の不振を慨歎するまえに、いったい今日の僧侶がいかにしてうまれてきているかを反省しなければならぬ。世襲的な寺院継承が、従来の真宗教団において見られたように、たしかに教団護持の上に大きな寄与をしてきたことは事実であり、それが日本の風土に適した仏教発展の過程でもあった。しかし今日の宗門における安直な僧侶養成が、これも時機相応というのか、時代の趨勢というのかは知らないが、至極安易となり、ことに特別講座という便利な制度で、一夏六週間で加行の資格が得られるということは、宗僧養成のための四年制の大学を二

つも持つ宗門当局者として、大きな矛盾を感じていることと思われる。宗門大学に入らない人材をたやすく僧侶にして宗門の水準を高めるというのであれば、宗門大学を自らいやしめるものとの非難が生ずる。抜本塞源の処理をこのさい特に関係当局に願ひしておきたい。深い学殖と長い体験のすえに辿りついたあとの、八十四歳で入寂するまでの三十七年の道綽大師の仏教は、観無量寿經を講ずること二百遍に近しいという統高僧伝の記事からも知られるように、観無量寿經の經説を中心として述べた安樂集二巻に尽きるといえよう。

三

教が時機にかなえば、衆生はその教を修しやすく悟りやすくなる。機と教が時代にそむけば修し難く悟りの門に入り難くなる。この大前提に立つて、五濁の惡世（末法）にふさわしい凡夫のための宗教として、曇鸞大師の遺蹟玄中寺に住んで日夜に故大師の芳躅にふれた道綽大師は、観無量寿經を中心としてのいまの世にふさわしい、下品下生の最もおろかな迷える人々が救済されるためには、難行道易行道の分別のほかに聖道門浄土門の区別をたて、自力で解脱する（聖道門）などの大それたできもせぬことはすててしまつて、聖道成仏の方便としてでなく、仏本願行としての衆生救済の称名の実践こそ、念仏の一行こそがいまの社会に最も適したものとさ

れたのである。

道綽大師は現に自分の生活している今日を、大集月藏經の說に拠つて、釈尊入滅後の五百年ごとの時代変化の中の、第四番目の五百年中にあたるとされた。当時の通說によると、隋の大業七年（六一一）が釈尊滅後一千五百一年となり、これは第四の五百年の第一年にあたるのである。この年は、道綽大師が浄土教帰信後三年目、五十歳の年である。おそらく大師の思想の中に末法觀を身につまされてひしひしと考察させる原因の一つとなつたことは疑いないであろう。第一の五百年は、釈尊入滅後まだ遠くはなく、慧^{さとり}を学ぶことに堅固^{つとまる}な時代、第二の五百年は正法のややおとろえてさとりを得るものは無いが禪定を学ぶことに堅固な時代、第三の五百年は實踐はなおざりにしてもっぱら多聞読誦に堅固な時代、第四の五百年は經典の読誦もなおざりにして塔寺を造立し、福業を修め、もっぱら懺悔するなどのことに堅固な時代、第五の五百年は、正法が全く隠没して互いに愚にもつかぬことを論評しあうことに堅固な時代の五期に分類し、自分の生きているいまはこの第四の五百年にあり、この時期はもはや正法の世は過ぎて、容易なことでは迷える凡夫は救済されない、塔寺を新たに造立することは、この時代にあつて必要なことではあるが、常人の行い得ることではない、わずかに懺悔修福し

て、仏の名号を称えることこそ、今の時代、今のわれわれに応じた修行であると説くのである。觀無量壽經にも説いているように、一度阿彌陀仏の御名を称えたならば、八十億劫もの永い生死の間に造つた罪も消除することができ、一念にしてなおかくのごとし、いわんや毎日毎日念仏称名を続けるならば、彌陀の浄土に決定往生^{かならず}できるといふ。道綽大師においてはまだ徹底して口称名号の一行のみに限らず、觀念の念仏もまた説くところもあるが、この第四の五百年の修行として大集月藏經にもとづいて彌陀仏名を称えることによる懺悔滅罪を強調したことは、やはり現前の社会不安、はかない人間の根本的な弱点などから、従来の聖道成仏のための方便としての浄土教を、直接に人間苦からの救済、解放のよりどころとしての実践行——称名念仏に高めたところに、中国浄土教史における大きな発展が理解されるのである。しかも、この道綽大師の見解は、當時に通用していた時代感覺——危機意識に立脚して、あくまで、当今——現にわれわれが生活しているいま——を眼目として成立したものであり、よつてこそ、当今の人々の帰信をあつめたものであることに、注目しなければならない。道綽大師が安樂集の中に自説を証拠づけるために引用された数多くの經論のなかに、淨度菩薩經、須弥四域經、惟務三昧經、善王皇帝尊經、十往生阿彌陀仏国經

などの、六朝時代中国で撰述されたいわゆる疑經がある。これらもまた、中国仏教の発展の上に、常に何時も、「今」が中心となって、当今の人々を救済するに足る仏典の新解釈の一表現であつたと言わなければならない。

四

道綽大師がたとえ一念にしても八十億劫生死の罪を消除する、しかれば毎日毎日念仏する恒懺の人こそ最も理想的な浄土往生の行人であり、その境地にまで衆生を誘導するためには、考えられたのが珠数であり、小豆念仏であることはよく知られている。むかしエジプトの沙漠に逃れた隠者たちは百五十の歌と祈りからなる詩篇を唱え、文字を知らない信者たちは、沙漠に二つの穴を掘り、一つの歌、一つの祈りがすむたびに、小石を石の穴から左の穴にうつして隠者とその徳を一つにしたという。これはのちにカトリック教会などで用いるロザリオの起源となったものとして知られる。仏教の珠数はもちろんロザリオよりは一千年以上もその歴史は古い。道綽大師は日課念仏七万遍を目標としたが、その念仏の数を知るためにも、おこたりがちな信者の心をはげますためにも木の実に造った珠数は必要であつた。念仏一遍ごとに小豆一粒を右から左にうつして、目の前にその念仏の行が一升二升とつみあげられて行くのを見ることは、いかにも念仏の功德が増

してゆくとみえて、一層精進の心を誘われ、はげまされることはよく理解されるのである。念仏の行はあくまで実践である。曇鸞道綽両大師の徹底的な研学のあとに、遂に帰着された、何人もが容易にできる称名念仏も、実はこのような根強い学問研究の基盤の上に、きわめてわかりやすい小豆念仏の実践があつて、はじめて多くの共鳴者を得たものである。宗教が単なる口頭禪に終るならば、それはついに一場の空理空談となつて当今の人々を導き得る理念とはならない。道綽大師の教を受けて念仏を実践した人々の中に、上なる者は八十石、九十石、中なる者は五十石、下なる者も二十石の小豆念仏をしたと伝えられる（迦才の浄土論）。また名古屋真福寺宝性院の往生浄土伝に、百十余人挙げている往生人の中に、七十余人までが山西省出身者であることも、玄中寺、道綽大師を中心とする山西の浄土教団の影響力の強さを示すものと言わなければならない。

文学博士 塚本善隆序
仏大講師 岸 覚勇著
定A 5 判
送料 三二
価 七八五
料 〇〇〇
円 円 頁

善導教學の研究

三重県四日市市六呂見町観音寺中

発行所 記主 禅師 鑽仰 会

振替 名古屋 四〇一二番

香 り た か き 浄 土 ト ラ ク ト

真理のはなたば 大正大学教授 佐藤 良智著 新書版 価 70円
20円

日常勤行式の解説 大正大幹事 村瀬 秀雄著 新書版 価 100円
90P 20円

信仰への導き 大正大学教授 佐藤 賢順著 B 6 判 価 15円
16P 10円

①月影抄 ②葵ぐさ 大正大幹事 村瀬 秀雄著 B 6 版 各冊 価 15円
16P 10円

浄土宗のおしえ 大正教授 宮林 昭彦著 新書版 価 25円
20P 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に (割引いたします)

発行所 法 然 上 人 鑽 仰 会 電 話 (262) 5944
振 替 東 京 82187

編 集 後 記

▽釈尊の降誕をお祝いし、
信行に心を新たにしたいと
思います。
▽佐藤密雄博士は、今般、
大正大学学長となられ、欣
賀に堪えません。ますます
のご活躍を期待いたしたい
と存じます。
▽生活の記録ともいうべき
小野、乙山両氏の玉稿は、
いろいろのことを考えさせ
られます。お礼申します。
▽茶の湯に生きた人々の話
も、仏教に関係ない人々が
多いのですが、一筋何か通
ったものがあることを感じ
ます。
▽茶五月号より「仏跡巡拜
親善使節団」の一員とし
て、東南アジアを旅行され
た佐藤行信編集同人の「東
南アジア旅行記」が掲載さ
れます。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄 土 四 月 号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十九年三月廿五日 印刷

昭和三十九年四月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿一

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

◇よい子に よい本 よい家庭◇

よいこのパンフレット

はなまつり

価十五円
十円

B5判 四ページ 多色刷

割引 価

百部より 単価 十二円
三百部より 十一円

(送料サービス)

竹中信常先生指導

めぐみ

価百円
四十円

B5判 四八ページ

おやくそく・はなまつり・こどもの日
おぼん・おひがん・じょうどうえ・ね
はんえ・ひなまつり・みおしえ……
保育テスト 三二ページつき

発行所 東京都千代田区 飯田町1の21 大 道 社 振替・東京8247
TEL <262> 5944

日本一の生産・設備

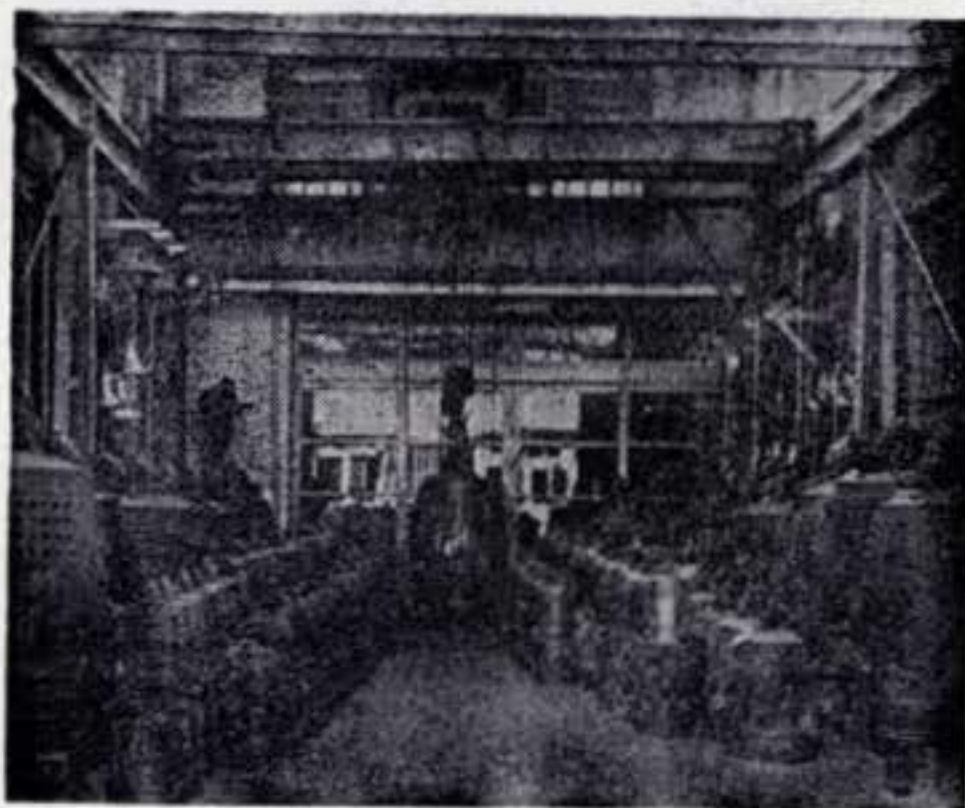
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展 参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 04 8847番 本社工場 高岡市横田